資料 1

大泉桜学園の検証におけるヒアリング記録（児童生徒および学校関係者）の総括

1　９年間を見通したカリキュラムを作成・実施することにより、発達段階に応じた計画的・継続的な学習指導および生活指導の充実を図ることができる。（主に学習指導、体力向上）

- ５・６年生の５０分授業について、児童は当初は面倒に感じたりしたが、次の授業の準備ができると受け止めており、学校の自慢の一つと感じている。
- 一部教科担任制について、児童は学校の特色の一つとして受け止めている。
- 勉強もよくみてもらえており、穏やかな子供たちが多く優しい。
- 学習するグループの変更がある算数の少人数授業については、肯定的に受け止めている。
- 小中一貫教育がよいのか小学校と中学校のままでよいのかよく分からない。

2　小学校から中学校へ進学する際の段差を緩やかなものにし、円滑な移行が図れる。その結果、不登校生徒を減少させることもできる。（主に生活指導、特別支援教育）

- 小学校籍の教員は丁寧語が多く、中学籍の教員は少ないなど教員の言葉づかいが違う。
- ５・６年生が中学校籍の教員と、７～９年生が小学校籍の教員と話すことがよくある。
- 小学生の時に指導を受けた教員に励まされたり、話ができたりすることはうれしい。
- ７年生の立場があいまいだと感じるとともに、７年生の活動の在り方に課題がある。
- 開校前は中学生に対しての恐さや緊張を感じて、中学校は別世界で雰囲気が暗いと感じるなどの印象があったが、開校後は同級生の兄姉に優しくされたうれしさや中学校の賑やかさを感じたり、標準服や生徒手帳、スクールバッグ等への楽しみを感じたりした。
- 道で会う時など、以前より児童生徒の挨拶が増えた。
- 高学年の児童生徒による悪い影響を開校前は心配していたが、それはない。
- 小学校時代の問題行動について情報提供がないため、中学校の学級編制に対する保護者からの不安や不満の声があったが、開校後は小学校の情報が共有されるようになった。
- 個別対応が必要な児童生徒への対応についてつながっており、児童は中学校に進学する不安がなく保護者も改めてそのことを話す必要がない。

3　幅広い異年齢集団による活動を通じて、豊かな人間性や社会性の育成ができる。（主に道徳、総合的な学習の時間、特別活動、進路指導）

- ４年生が東校舎で最上級生となり、読み聞かせやたてわり班の班長を経験することは大変だったが楽しく、よい経験になった。
- 開校時の５・６年生は、班長になる機会がなくなり、残念な気持ちを感じていた。
- 児童生徒会役員会や飯盒炊さん等の活動では、先輩が大きな存在で肩身が狭く感じる一方、先輩が見本となり、教えられることが多い。
- ７年生は先輩も後輩もいるため、緊張感をもったり手本になろうと思ったりしている。
- あいさつができることは学校のよいところだと思う一方、先輩への言葉遣いで敬語を使

うことが少ないことは課題である。

- ふれあい給食など離れた学年との交流や９学年が一緒に行う学校行事等、他の学年と交流する学校行事を増やしてほしいとの意見がある。
- 交流給食は、何を話していいか分からず緊張するという声もあるが、緊張する気持ちや小さい子と何かを話そうとする体験が大事である。
- 大泉学園桜小学校でやっていた文化的行事のシェリ祭りを希望する児童生徒がいる。
- 運動会は、小学生の競技を見ることや小学生の中学生への応援、部活動の後輩への応援等、運動会は学校が一丸となっている印象や懐かしさ、楽しさを感じている。
- 運動会は、兄弟姉妹が多い家庭にとって保護者が楽だと感じる。
- 開校当時、中学校籍の教員は運動会に対する否定的な意見を述べていた。
- ７～９年生の運動会は、学級対抗がよい。
- 桜祭を始め学校行事が賑やかで明るくなり、小学生へのよい影響を感じる。
- 小学校は劇の方がよいとか、小さい子供を連れて会場まで行くのは大変だという声はあるが、全学年が一緒に行う桜祭はよいという。
- 上級生が下級生の面倒をよくみている姿があり、運動会や桜祭から小中一貫教育の意義が感じられた。
- １・７年生合同の入学式は微笑ましくてよいが、６・９年生合同の卒業式は中学校の卒業式のイメージに近いので、分けて行うことを希望する。
- ５・６年生が部活動で中学生と関われるのはよいが、下校時刻を保護者が心配した。
- ５・６年生から部活動をやっていると７年生で入部した生徒との違いが大きい。
- 部活動で親しくなり仲がいいことは長所だが、先輩への緊張感がなく敬語を使わないなど先輩との関係が厳しくない面がある。
- ３校連絡会では、中学生のボランティアなど特別支援学校での活動が感謝され、楽しみにしていると言われている。

4　小学校の教員と中学校の教員の相互協力関係が今まで以上に構築でき、学力や体力の向上等の高い教育効果を上げることができる。（主に学校運営）

- 開校前には、小学校の教員と中学校の教員の指導の姿勢や児童生徒への関わり方、宿題の量など違いを感じたが、開校後、中学校籍の教員が東校舎に来たり小学校籍と中学校籍の両方の教員が協力していたりするなど、雰囲気が変わった。
- ９学年が一緒で教員は大変だと思うが一生懸命やっている。
- 小中一貫教育校の条件として一番いい学校である。

5　地域社会と連携した特色ある学校づくりを推進し、魅力ある学校とすることによって、保護者や地域社会からの信頼を得られる。その結果、学校と地域社会の活性化を図ることができる。（主に保護者、地域）

- 地域の野球クラブも校庭が使えて助かっている。野球部がなかった時代から子供たちの受け皿として活動してきた経緯もある。
- 主任児童委員が関わるケース数はそれほど変わらない。
- 関係する町会は三つあり、避難拠点運営連絡会を含めて小学校と中学校と別れて関わる状況があったが、今は学校が一つなので関わりやすく、関係がスムーズになった。
- 開校に向けていろいろな意見はあったが、今はいい方向に動いている。
- 児童放課後居場所づくり（ひろば）事業では、開校前は雨天時に東体育館を使っていたが、開校後は部活動のために使えなくなった。５・６年生は部活動、４年生は委員会活動などのためにほとんど来ないため、１～３年生だけとなるので部屋で大丈夫である。
- 開校前は、当時の家庭科室（今のランチルーム）を使っていたので準備が大変だったが、開校後は専用の部屋が用意されている。
- ひろば事業のさくらっ子まつりに中学生が手伝いに来たり、学校応援団のクリスマスコンサートには吹奏楽部が参加したりしている。
- 小中一貫教育校しか知らない保護者が多くなり、今の学校が当たり前と思っている。
- 青少年育成の活動については、開校後も変わりはない。
- 町会の運動会に来た児童・生徒がラジオ体操をきちんとやるので驚いた。また、地域や町会の祭りにもよく来るが、大騒ぎすることはなく、言うことを聞く子供が多くなった。
- 地域の祭りに吹奏楽部も参加し発表していると地域に元気が出る。
- 小中一貫教育校設置の話を聞いた時、ホームレスの自立支援施設の対応もあったので区の対応により学校も街もよくなると思った。
- 本校が区界にあり三方向に住宅地もないため子供が集まりにくい状況だが、部活動も増えるなど開校してよかった。
- 避難拠点運営連絡会の活動について学校との連携もスムーズになった。
- 保護者会組織の桜連絡会は、開校当時は小学部、中学部は別々に活動していたが、今年度に初めて小中合同で役員会を開いた。
- 開校当時のＰＴＡ活動は、小学校と中学校で組織や会費、会議時間も小学校は午前中で中学校は夕方や土曜日など大変だった。
- 保護者は全体的におとなしい感じの人が多く、他の小学校から入学した生徒の保護者を仲間に入いれないということはない。
- 保護者会組織である桜連絡会の委員は会議の時間帯を併せたり、学校行事で小学部と中学部が一緒に活動したりすることが増えた。

6　施設整備における効果と課題 職員室、東校舎・西校舎、渡り廊下、校庭、ランチルーム、多目的室、プール、体育館、学習室、保健室、相談室、個別学習室、学校図書館ほか

- 開校前は小学校から中学校へ行く時に靴をはいて外を回っていたが、開校時に小学校と中学校の校舎の間にあった通路のしきりがなくなった。

- 職員室に鍵を取りに行く時など一つになった今の方が緊張感はあり、小学校籍の教員は奥の方に座っていて呼べなかった。
- ５・６年生で西校舎に行けるのは嬉しく、階段の高さも異なり、大人になった感じがしたが、特別教室の移動が増えた。
- こじんまりした少人数の中学校が好きだったので中学校に入学したが、開校後は学級の生徒数が４０人近くなって教室が狭くなった。

7　小中一貫教育の課題を解決し推進するための先導的な役割、通学区域と学校選択制度、教育委員会の役割

- 大泉桜学園は小規模校で人数が少ないから埋もれずに活躍できる。
- 他の小学校の通学区域ではあるが、中学校の通学区域に該当するので小学校段階から通うことを考えているという話もある。
- 他の小学校の通学区域だったが、中学校の通学区域に該当していたこと、新しい友達をつくりたかったこと、小中一貫教育校に興味があったことなどから入学を決めた。
- 部活動が少ないので部活動を理由に児童が他の中学校を選ぶことは課題である。
- 勤めている保護者としては、兄弟姉妹の通う学校の行事が一緒になり、教員との話も一緒で利便性が高まると感じた。
- 兄弟姉妹の下の子供は上の子供と一緒になって喜んでいた。地震などの時は必ず下の子供を連れて帰るように上の子供に言っていた。
- 陸上部や卓球部、パソコン部、文化部が少ないので中学校選択制度により他の中学校を選ぶ人が多い。保護者も子供も部活動と友達で学校を選んでいる感じがあり、小中一貫教育校かどうかは気にしていない。
- ７年生から入学する時に途中からなので入り辛いということは全くなく、抵抗もない。
- 初めて小学校に子供を入学させる保護者は、中学校のことまでは考えていないが、高学年になって中学校のことを考えている。
- 他の小学校に通っていた時には、大泉桜学園の情報はなかった。他の中学校の話が中心で、大泉桜学園のことを何も知らないまま入学した。
- 他の小学校と学校行事が重なることが多いので、見に来られる機会をつくるとよい。
- ９年間、児童生徒同士や教員が同じでは嫌だという人もいる。マイナスのイメージを引きずってしまう。
- ６年生は本校の部活動の様子が見えており、ある意味でワクワク感がない。そのことが中学校選択制度に影響する面がある。